

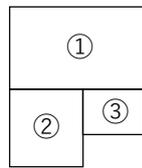
切さも反映されています。実際に令和元年の訓練では、小向会館から施設までの安全な道を確認したり、車いすの方の搬送や生活用水の運搬を行いました。「普段からの付き合いがあったから、助け合いが協定の形にまいった。今後は他の施設とも助け合いの関係を広げていきたい。」(田中会長)

防災まちづくり地区間交流会

防災まちづくりの3年目には、同じ時期に始めた3つの町内会(幸区小向町内会、高津区二子第2町会、多摩区かりがね台自治会)が小向会館に集まり、地区間交流会を開催しています。



交流会では、それぞれの地域の歴史や取り組んだ防災活動を発表して意見交換を行っています。また、現地視察では、消火ホースキットや、行き止まりの通り抜け通路などを見て回りました。特別講演では東京大学加藤教授にお越しいただき、「防災まちづくりく外してはいけない「ツポ」〜」と題して、活動を続けていくコツを教えてくださいました。地域社会の衰えを補いながら、女性だけのワークショップといった住民の力を引き出す工夫や、担い手の拡大などが重要になってくるようです。交流会をきっかけとした町内会同士のつながりは続いており、互いの活動のモチベーションに繋がっています。



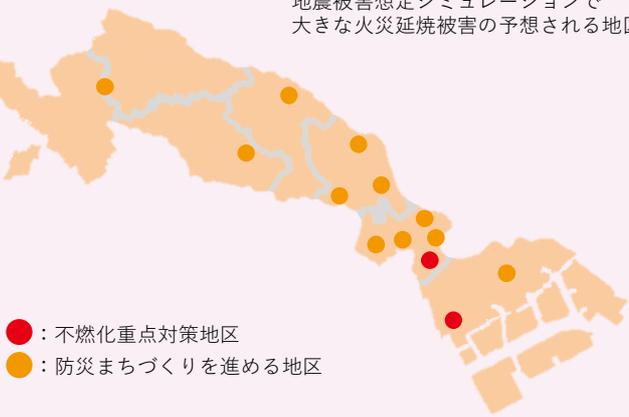
①地区間地区間交流会
②合同訓練
③協定締結の様子

川崎市の防災まちづくり

火災延焼クラスター

川崎市の地震被害想定シミュレーションでは、木造住宅が密集している地域を中心に大きな火災延焼の被害が予想されています。大きな地震が起きると、火事が起きて消防の手が回りきらず、どんどん延焼が広がって地域一帯を燃え尽くしてしまう可能性があります。この一帯に燃えてしまうまとまりを火災延焼クラスターといいます。市内には1000棟以上のクラスターが数十か所あり、特に被害の大きい川崎区の小田と幸区の幸町を「不燃化重点対策地区」に指定して、規制や補助を使った重点的な取組が進められています。その他の延焼リスクの高い地域では、住民の方に火災延焼の危険性を伝えながら、自助や共助の活動を盛り上げて、地域防災力を高める防災まちづくりが行われています。これが取組の発端となっています。

地震被害想定シミュレーションで大きな火災延焼被害の予想される地区



糸魚川市の大規模火災

最近の大きな火災というと、平成28年に起きた新潟県糸魚川市の大規模火災を覚えている方も多いと思います。飲食店から出火し、火の粉が風に煽られて周囲に飛散し、147棟が焼損しました。ベニヤ板が燃えて飛んでいったとの証言もあるほどで、火の粉が道路や建物を超え、離れた場所でも火の手が上がっていったようです。大地震が起きたわけではなく、通常の消防活動は行われましたが、それでも4万㎡を超える焼失面積が出ています。近頃の災害というと、洪水や土砂崩れといった風水害の話題が多く、大きな火災が思い浮かぶ人はあまりないかもしれません。しかし全てが燃えてなくなってしまう火災はやはり大きな危険を持っています。大地震が起きた時、自分の家が揺れに耐えて無事であっても、周りの家が燃えて延焼してしまえば財産を失うばかりか命の危険にもさらされます。延焼クラスターはこうした危険をはらんでいます。

おわりに

防災まちづくりはおかげさまで5年目を迎え、地域の方たちの努力により、さまざまな防災活動を実現することができました。これからは多くの地域にこの防災まちづくりを広め、活動のヒントやきっかけになりたいと考えています。また、地域のために頑張っている方々にもスポットを当て、活動を紹介し、住民の方に身近に感じてもらえるようにしていきたいと思っています。この防まちこもんずが、地域で活動する方々の助けになれば幸いです。今後ともよろしくお願いたします。